

JALCの「ミッション」と「コンセプト」

JALCでは「JALCのミッション（使命）と目的」、IBCLCによる母乳育児支援に関する「10のコンセプト」を作成しました。

「JALCのミッション（使命）と目的」は、組織としての使命と目的を考えました。

また、「10のコンセプト」は、IBCLCとして母乳育児を支援するとはどういうことなのかをわかりやすくまとめて実践に役立てて欲しいとの願いが込められています。

ぜひご一読いただき、IBCLCという専門職がどういうことを求められているのかの理解の一助としていただけたらと思います。（2007 副代表 所恭子）

【 JALCのミッション（使命） 】

NPO法人日本ラクテーション・コンサルタント協会(JALC)は、母乳育児の保護・推進・支援のために、次の3つの使命を担っています。

- (1) 「母親と子どもの立場にたって、適切な支援ができるIBCLCを育てる」
- (2) 「科学的根拠に基づいた情報を母乳育児支援者に広く発信する」
- (3) 「母乳育児支援専門家の団体として、社会に働きかける」

【 IBCLCによる母乳育児支援に関する「10のコンセプト」 】

NPO法人日本ラクテーション・コンサルタント協会 (JALC) は、次の「10のコンセプト」をIBCLCが母乳育児支援をするときの大切な考え方だと認識しています。

- (1) 「IBCLCは、精神的支援（エモーショナル・サポート）を基本においた支援をする」
- (2) 「IBCLCは、母乳は無比のものであることを認める」
- (3) 「IBCLCは、母乳育児が母親と赤ちゃんとの共同作業として成り立つものであると考える。この認識の上に立って、両者を観察し、適切なアセスメント（その時の状況・状態の評価）を行い、必要な支援を提供する。」
- (4) 「IBCLCは、母親の“力”を信じる」
- (5) 「IBCLCは、母親が自信をもって母乳育児ができるように支援する」
- (6) 「IBCLCは、科学的根拠に基づく母乳育児支援を行う」
- (7) 「IBCLCは、子どもへの栄養法を決めるのは母親自身であることを認識する」
- (8) 「IBCLCは、授乳期間は、その母と子が自ら決めることを認識する」
- (9) 「IBCLCは、IBCLCとして適切と考える母乳育児がなされていない職場で働く場合にも、周囲との相互理解を基本としながら、一歩ずつよりよい支援を目ざしていく」
- (10) 「IBCLCは、自分の属する職場や組織、そして社会全体を、より母乳育児にやさしくするために努力する」

【 「10のコンセプト」の解説】

- (1) 「IBCLCは、精神的支援（エモーショナル・サポート）を基本においた支援をする」

▼解説

母乳育児支援を行うときには、まず母親の話を傾聴しその気持ちに共感することがなにより大切です。

母親が支援者に温かく受容されていると感じられると、母親と支援者の意思疎通（コミュニケーション）が円滑になり、支援を効果的に行うことができます。自分の感情や悩みが明らかになるにつれ、

母親自身がその問題をより深く理解し、解決法を考えられるようになるでしょう。母親が本来持っている力を引出せるような支援（エンパワメント）が大切です。

（２）「IBCLCは、母乳は無比のものであることを認める」

▼解説

母親の母乳はその子どもに最適なものであり、他のものとは比べることのできない最も優れたものです。ある女性の母乳や母乳育児に関して、「良い・悪い」を表すような言葉で比較・評価することは、科学的根拠に基づく姿勢ではありません。またそのように判断されることによって、母親が自己評価を下げ、子育てへの自信を失うことにつながるかもしれません。「母乳は我が子へのかけがえない贈り物である」ことを母親に伝えましょう。（ただし、ガラクトース血症などのように、医学的に母乳が禁忌であると考えられるときには、特別の配慮が必要です）

（３）「IBCLCは、母乳育児が母親と赤ちゃんとの共同作業として成り立つものであると考える。この認識の上に立って、両者を観察し、適切なアセスメント（その時の状況・状態の評価）を行い、必要な支援を提供する。」

▼解説

母乳育児は、母親と子どもが相互に影響し合う共同作業として成り立ちます。支援をするときには、母親の乳房のみに注目するのではなく、ポジショニング（授乳姿勢・抱き方）やラッチ・オン（吸着、吸い付かせ方、含ませ方）がうまくいっているかどうかなどを中心に、一連の授乳行為を、母親と子ども双方の視点に立って観察することが大切です。

（４）「IBCLCは、母親の“力”を信じる」

▼解説

IBCLCは、もともと母親の中にあるあらゆる“力”を信じます。それは、直観力、洞察力、判断力、決断力をはじめ、家族への愛や知識なども含まれています。つまり、母親はわが子のエキスパートであり、自分自身や家族に何が必要なのか、何が問題であるのかを一番良く理解する“力”を持っている存在なのです。

（５）「IBCLCは、母親が自信をもって母乳育児ができるように支援する」

▼解説

それぞれの母親と子どもによって最善となる母乳育児の方法は異なります。IBCLCの仕事は、一人ひとりの母親が自分の育児に自信を持ち、生き生きとした子育てができるように個々のニーズに合わせて支援することです。そのためには、母親自身が、適切な母乳育児の知識や方法を知り、また起こりやすいトラブルに対するセルフケアの能力を持てるような支援をすることが大切です。専門家が手を貸すことが必要な場合でもその問題を母親が自分自身で解決し、自立していけるような支援を行うことが必要です。

（６）「IBCLCは、科学的根拠に基づく母乳育児支援を行う」

▼解説

IBCLCは科学的根拠すなわち、科学的な原理、最近の研究、最新の情報に基づいて業務を行うことが重要です。妊娠中の乳房の手当てや、時間を決めた授乳については、科学的な根拠はありません。また、漢方、鍼灸、マッサージ、整体、アロマセラピー、ホメオパシーなどの様々な代替療法に関しては、その根拠が明らかになっていないものが多いのが現状です。

IBCLCとしては、まず、科学的根拠がはっきりしているものから母親に提案していく必要があります。

代替療法について、母親から聞かれたり、選択肢として提案したりする場合にはその代替療法について、科学的根拠がどれくらいあるのか、またそれらの方法の利点やリスク（不利点）などをわかりやすく母親に伝えます。母親の希望や価値観を十分に尊重し、最終的な選択は母親にゆだねます。

母親に、様々な選択肢を提供するときには、利益相反*にならないような、慎重な情報提供が必要であることも、忘れてはなりません。

*利益相反：最優先すべきクライアントである母と子の福祉（一次的利益）が、保健医療従事者自身の金銭的な報酬など（二次的利益）によって、不当に影響を及ぼされる恐れがある状況を指します。

（7）「IBCLCは、子どもへの栄養法を決めるのは母親自身であることを認識する」

▼解説

子どもへの栄養法を決めるのは、母親自身です。適切な情報を提供した上で、母親が栄養法を決定できるように支援していきます。その結果として、母親が母乳育児を選択しなかったり、早期に母乳育児を中止する選択をしたりした場合でも、その選択を尊重し十分な支援を提供します。

（8）「IBCLCは、授乳期間は、その母と子が自ら決めることを認識する」

▼解説

授乳期間の目安としては、WHO/ユニセフの提唱している2年以上が適当であると考えます。ただし、実際の授乳期間は、その母と子が自ら決めるものであり、IBCLCの仕事は必要な支援を提供しながら見守ることです。

（9）「IBCLCは、IBCLCとして適切と考える母乳育児がなされていない職場で働く場合にも、周囲との相互理解を基本としながら、一歩ずつよりよい支援を目指していく」

▼解説

母乳育児支援にはさまざまな考え方や方法があり、IBCLCが理想とするものと異なる場合もあります。

意見の違う人の話にもまず傾聴し、さらに様々な情報や今直面している母乳育児支援についての課題を共有して、お互いの理解を深めていきます。IBCLCとしてすべて賛同できる状況でなくとも、一致できる部分を増やしていきながら、一歩ずつよりよい支援を目指していきます。

（10）「IBCLCは、自分の属する職場や組織、そして社会全体を、より母乳育児にやさしくするために努力する」

▼解説

「母乳代用品のマーケティングに関する国際規準（略して「国際規準」）」を有効に活用することは、母乳育児を保護・推進し、母乳育児にやさしい社会にするために欠かすことのできないものです。現在の日本では「国際規準」が十分生かされていないため、IBCLCの属する職場や組織が、これらを遵守していないことが少なくありません。このような中で、IBCLCは様々な局面で「国際規準」が守られていく方向に変えていこうという意思をもち、努力していくことが大切です。

「コンセプト作成特別チーム」作成、2007年度理事会全員一致で承認

NPO 法人日本ラクテーション・コンサルタント協会